

武蔵野日曜集会

光の福音

――エペソ書第5章1～21節――

1992年2月16日（武蔵野）

小池辰雄

神に效う者 馨しき香の献物 汝らもとは闇 今は主に在りて光 光の子供らしく エホバは
永遠になんじの光 死人の中より立ち上げれ 聖霊にて満たされよ 福音は3L

【エペソ5】

1 されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效う者となれ。2 又キリストの
汝らを愛し、我らのために己を香しき香の献物とし犠牲として、神に献げ
給いし如く、愛の中をあゆめ。3 聖徒たるに適うごとく、淫行、もろもろの
汚穢、また慳貪を汝らの間にて称うる事だに為な。4 また恥すべき言・愚か
なる話・戯言を言うな、これ宜しからぬ事なり、むしろ感謝せよ。5 凡て淫
行のもの、汚れたるもの、貪るもの、即ち偶像を拜む者等のキリストと神と
の国の世嗣たることを得ざるは、汝らの確く知る所なり。6 汝ら人の虚しき
言に欺かるな、神の怒はこれらの事によりて不従順の子らに及ぶなり。7 こ
の故に彼らに与する者となるな。8 汝ら旧は闇なりしが、今は主に在りて光
となれり、光の子供のごとく歩め。9 （光の結ぶ実はもろもろの善と正義と
誠実なり）10 主の喜び給うところの如何なるかを弁え知れ。11 実を結ばぬ暗き
業に与する事なく反つて之を責めよ。12 彼らが隠れて行うことは之を言うだ
に恥すべき事なり。13 凡て斯る事は責めらるるとき、光にて顕さる、顕さる
る者はみな光となるなり。14 この故に言い給う『眠れる者よ、起きよ、死人
の中より立ち上げれ。然らばキリスト汝を照し給わん』
15 されば慎みてその歩むところに心せよ、智からぬ者の如くせず、智き者
の如くし、16 また機会をうかがえ、そは時悪しければなり。17 この故に愚とな
らず、主の御意の如何を悟れ。18 酒に酔うな、放蕩はその中にあり、寧ろ御
霊にて満たされ、19 詩と讚美と霊の歌とをもて語り合い、また主に向かい
心より且うたい、かつ讚美せよ。20 凡ての事に就きて常に我らの主イエス・
キリストの名によりて父なる神に感謝し、21 キリストを畏みて互に服え。



●神に效う者

今日はエペソ書5章1節から21節までいたします。22節からは別なグループになるものですから。「光の福音」と題しました。

「されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效う者となれ。」

面白い言い方をしてる。神さまは子供たちを愛する。そうすると、子供はむしろ無意識的に――理屈でなくて――神に近いわけですね。直感的に、或は直覚的に信頼するですね、子供は。大人になると、いろんな事を考えてはゴタゴタしちゃう。

キリストは幼子を非常に愛されて、

「^{ひるがえ}翻りて^{おさな}幼児の如くならずば天国に入れない」

とおっしゃった。童心です。本当に偉大な人は童心を失わない。童心を失ったら、ダメなんです。どんなに利口でも、知恵があっても。

「三つ子の魂百までも」

というが、本当にそうならばいいけれどもね。大人は、いろいろな知識があったり、結構なことですが、その中心に童心がなかったら、その人は本当の偉大にはなれない。偉大な人物を見ていると、そういう童心的な単純さをもっている。「単純な偉大さ」です。日本の国旗が、単純な偉大さです。

童心は、別な言葉でいうと、「無心」なんです――「心無きひと」という言い方は意味が違う――無心という素晴らしい言葉がある。無心の境地とか。無心は無私に通ずる。別な意味でまた「心あるひと」という言い方がありますけれども。

「されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效う者となれ。」

「^{なら}效う」という訳はいい。「真似する」というようなギリシヤ語ですけれども、これはむしろ「^{ならう}ならう」の方がいい。

●馨しき香の献物

2又キリストの汝らを愛し、我らのために己を馨しき香の献物とし犠牲として、神に献げ給いし如く、愛の中をあゆめ。

大変な言葉だ。十字架の死のことです。これはレビ記1章からきている言葉で、レビ記は宗教的な献げ物のことがたくさん書いてある。1章から7章までが献げ物の律法のことです。詳しく書いてある。

「⁸而してアロンの子等なる祭司等その切りわかてる者その首およびその脂を壇の上なる火の上にある薪の上に陳ぶべし。⁹その臓腑と足はこれを水に洗うべし。斯て祭司は一切を壇の上に焼て燔祭となすべし。是すなわち火祭にしてエホバに馨しき香たるなり。」(レビ1:8～9)

と書いてある。ちよつと、我々にはピンとこないような内容です。そういう、動物を犠牲



にして献げた煙が「エホバに馨しき香」である、と。昔の、原始時代の宗教というのは、こういうところが他の宗教でもある。「エホバに馨しき香」という言葉は13節と17節にも出ている。

キリストの十字架の死のことを、「馨しき香」なんて言いたくない。パウロはこの時、旧約に例えてそんなことを言っている。レビ記の7章の終りの方に、

「³⁷是すなわち燔祭、素祭、罪祭、愆祭、任職祭、酬恩祭の犠牲の法なり。」(レビ7・37)

と、1章から7章までをひつくるめて言っている。これだけの律法が今まで語ったところだよと。

²又キリストの汝らを愛し、我らのために己を馨しき香の献物とし犠牲として、神に献げ給いし如く、愛の中をあゆめ。

キリストの愛は犠牲的な愛である。それはもちろん、罪の贖いのための犠牲の愛です。

「献げ給いし如く愛の中を歩め」

と。

「犠牲的な愛で歩け、人のために己を棄身でかかれ」

ということになる。これは、もの凄くキリストの愛に燃やされないと、しみ込まないと、そういう愛に歩むということは簡単にはできない。

賀川豊彦がこれをやった。この愛に歩んだ。その点では、私は賀川さんは素晴らしいひとだと思っている。内村鑑三、藤井武よりも、そういう意味においては、新島襄とか賀川豊彦は、特に賀川豊彦は一番キリストに近いでしょうね。彼はとうとう身体を随分こわしたし、失明もしてしまった。

何も無教会の悪口を言うわけじゃないけれども、無教会というのは、或る一つのポーズと考え方の枠がある。困ったものだ。そこから抜けなくてはいいかん。本当に尊敬すべきもの、評価すべきものは尊敬し評価しなければ。パウロはそういう境地を持っていた、宗教の如何にかかわらず。だから、私は仏教の偉大な坊さんは尊敬します。

とにかく、こちら側の何か主観があつてはいかん。本当に神の光で、キリストの光で見ているか。その意味でも、「光の福音」というのは、この「光」の内容は――宗教の世界はみな「光」という、「お光さん」なんていうのもあるし――けれども、キリストの光はまた別だから。目が眩んでしまうような光でもあるし、また非常にやさしい和光でもある。ちょうど、空気がじつとして動かないときもあるし、また、そよ風になったり、嵐になったりする。素晴らしいものというのは、いろんな様相を持っている。キリストの光もそうです。光に会えば、悪い奴はぶつ倒される。救いの光にもなるし、審判の光にもなる。



● 汝らもとは闇

3 聖徒たるに適うごとく、淫行、もろもろの汚穢、また慳貪を汝らの間にて称うる事だに為すな

このことは、パウロがローマ書1章にも書いている。

4 また恥ずべき言・愚かなる話・戯言を言うな、これ宜しからぬ事なり、むしろ感謝せよ。

「むしろ感謝せよ」という言い方はちよつとおかしい。

「そんなことではなくて感謝せよ」

ということ。日本語の「むしろ」という字は、こんなところで使うと、ちよつとおかしい。という事です。

コリントという所は、淫行が随分はやっていたらしい。そういう淫らな関係が、「コリント」の代名詞みたいになる。昔のバビロン、ギリシヤのコリント、現代の大都会の或る所はそうです。

5 凡て淫行のもの、汚れたるもの、貪るもの、即ち偶像を拜む者等のキリストと神との国の世嗣たることを得ざるは、汝らの確く知る所なり。

それはその通り。だから、ユダヤでは、神は靈的な存在だから、神を偶像にしませんから、彫刻はしない。だから、イスラエルでは、彫刻や絵画は発達しなかった。音楽だけ。音楽の世界は素晴らしいんだ、旧約から。彫刻、絵画はダメなんだ。徴として、彫刻や絵画を決していい加減に取り扱うべきものではありませんけれども、それがいわゆる偶像化されたら、それは大間違いだ。

6 汝ら人の虚しき言に欺かるな、神の怒はこれらの事によりて不従順の子らに及ぶなり。7 この故に彼らに与する者となるな。

パウロは、なかなか具体的に、相手を考えながら語っています。

8 汝ら旧は闇なりしが、今は主に在りて光となれり、光の子供のごとく歩め。

「世」という言葉は、「罪の世」とか「闇の世」とかいつて、「この世」という時には、「罪」とか「闇」という限定語がとかくあるんです。そういった「世」を愛して、そのために独子を渡した、と。

「独子を賜うほどに世を愛したまえり」

という、その「世」というのは「罪の世」「闇の世」のことです。

「闇の世、罪の世を愛した」

というのは、

「闇の世、罪の世を救わんとして愛した」

ということ。「愛したまえり」ということは「救わんとした」ということ。簡単に言うと、「救



った」ということです。相手を助けたり救ったりすることが、「愛する」ということの具体的な内容です。

●今は主に在りて光

「今は主に在りて光となれり」

と。これははつきりと素晴らしい言葉ですね。

「フォース・エン・クリオー」

「主に在りて光である」

という言い方をしています、はつきり。これは強いですね、「今は主に在りて光となれり」と。

「汝らは世の光なり」

「我は世の光なり」

と。この光に会うと、悪い奴は自分が裁かれたと思うし、平伏す人はその光でもって救われる。光が闇にくると、闇が逃げていくような闇ではダメなんだ。この闇は、光の中に自分を入れると、光に化せられる、光化される。

「主にありて、光化せられたる者なり」

というわけです。これは、

「エン・クリスト」

です。「によつて」ではない。「にありて」「エン」が大事なことです。

「今は主に在りて光となれり」

と。こういう「光となれり」というのを、ただ形容詞みたいに思っただけでいかん。本当に光でなくては、我々は。人にはどう見えようと、本当は光っている。破れ器から光が発しているわけです。みんな、お互いさま、破れ器だ。「罪びと」というのはそのことだ。それが、光体となった、光の身体に。

●光の子供らしく

私は、旧約で「光」というと、すぐくるのはイザヤ書なんです。イザヤ書60章は光の讃歌と言ってもいいくらいです。旧約から新約まで、「光」という言葉をコンコルダンツで調べたら、たくさんあってもう大変です。拾いきれない。そのくらい、光という言葉は聖書に満ちている。

「起きよひかりを^{はな}発て、なんじの光きたりエホバの栄光^{てりい}なんじのうえに照出^でたればなり。」(イザヤ60・1)

素晴らしいでしょ、このイザヤ書60章1節は。「光」はヘブライ語で「オール」という。「栄光」「カーボート」というのは「光」という字とは別の字です。その内容は、「栄光」も似たようなものですが。



8…今は主に在りて光となれり、光の子供のごとく歩め。

「光の子供のごとく」

「ホース・テクナ・フォートス」

「光の子供のごとく」は「光の子供らしく」と言った方がいい。もちろん「ホース」という字は「ごとき」と訳せないことはないですが。ドイツ語の訳では、「アルス・キンダー」と書いてある。「ヴィー」と書いてない。この「アルス」はいい訳だ。

「光の子供らしく歩め」

と。ドイツ語でいうと、「子供らしく」というのは「キントリッヒ」という。「キンディッシュ」というと「子供っぽい」という字です。

「子供」というのは「人」「子ら」という意味です。ドイツ語で、「エルデンゾーン」という言葉が『ファウスト』の中にも出てきますが、「息子」という字を使っている。

「サン・オブ・ズイ・アース」

「地から生じた者」

という――土をこねて人を造ったでしょ――あのヘブライ語の言い方から来ている。「地の子ら」という。地的な要素からできている。それから、天的な神さまの息がかかっている。天的な要素と地的な要素が、天地が一緒になっているのが、人間です。地獄と極楽みたいだな。「地」が地獄ではありませんけれども。

●エホバは永遠になんじの光

イザヤ書60章2節から、

「²視よくらきは地をおおい闇はもろもろの民をおおわん。されどなんじの上にはエホバ照出^{てりいで}たまいてその栄光なんじのうえに顕^{てりいで}わるべし。³もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなんじが光輝^{かがやき}にゆかん。

イスラエルを非常に祝福して、

「エホバの光だぞ、しつかりしろ」

と。ずつと、「輝く」だの「よろこぶ」だのと、いろんな字が出ている。

⁷…斯てわれわが栄光の家をかがやかすべし。⁹…エホバなんじを輝かせたま
いければなり。¹⁵…今はわれ汝をとしえの華美^{はなやか}、よよの歡喜^{よろこび}となさん。¹⁶な
んじ亦もろもろの国の乳をすい王たちの乳房をすい

「王たちの乳房をすい」というのはちよつと訳がおかしい。「王たち」というのは「王族」ということで、「王族の乳房をすい」というのは、

「王族たちの優れた内容をみな吸い取る」

ということなんです。恵の内容です、この「乳房」ということは。

而して我エホバなんじの救主^{すくいぬし}なんじの贖主^{あがないぬし}ヤコブの全能者なるを知るべ



し。

「救主」「贖主」「全能者」と、たたみかけて言っている。

19 昼は日ふたたびなんじの光とならず月もまた輝きてなんじを照さず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神は栄となり給わん。

「エホバが光となる」という言葉は、黙示録がこれに応じて書いている。

「月も日も要らん、神さまと羔が光となる」

と黙示録の終りの方に出ている。

20 なんじの日はふたたび落す、なんじの月はかくることなかるべし、そはエホバ永遠になんじの光となり、汝のかなしみの日畢るべければなり。」(イザヤ 60・2・20)

ここでは、日と月を相対的に、沈まないということを言っている。だけれども、本当の光はエホバです。

そういうわけで、イザヤ書60章というのは、非常に、光の讃歌みたいなところですよ。要するに、イスラエルが万国の光となるんだと。けれども、今のイスラエルはイザヤ書みたいなイスラエルではない。困ったものだ。ユダヤ人は、預言者の言葉よりも律法を重んずるからです。律法にこだわっているから。旧約聖書も、簡単に言うと、「律法」「トーラー」というのと同じことになる。

●死人の中より立ち上がれ

9 (光の結ぶ実はもろもろの善と正義と誠実なり) 10 主の喜び給うところの如何なるかを弁え知れ。 11 実を結ばぬ暗き業に与する事なく反つて之を責めよ。 12 彼らが隠れて行うことは之を言うだに恥すべき事なり。 13 凡て斯る事は責めらるるとき、光にて顕さる、顕さるる者はみな光となるなり。 14 この故に言い給う『眠れる者よ、起きよ、死人の中より立ち上がれ。然らばキリスト汝を照し給わん』

これも随分強い言葉だな。これは引用みたいな文句だ。「この故に言い給う」と、どこからこれは引いてきたのか分からない。けれども、私は、先にイザヤ書60章を開いたけれども、この

「起きよ、死人の中より立ち上がれ」

という、「死人のうちより」という言葉はないけれども、

「起きよ、立ち上がれ」

は、これは正にイザヤ書のこの言葉と通ずるんで、ここを読んだ時に、あつこれはイザヤ書だなと思った。

「起き上がれ、キリストの光を浴びろ」



と。あるいは逆に、

「キリストの光を浴びると起き上がらざるを得ない」

というわけです。正に、「眠れる者よ」です。クリスチャンなんていったって、聖書を読んでいたって、「眠れる者」式なのはたくさんいるけれども。

キリストの中に眠るのはいい。キリスト抜きに眠ってはダメなんだ。キリストの中に「お休みなさい、主さま、あなたの懐に入って寝ます」

と。昨日だか、一昨日だか、不思議な夢をみたな。本当にもう表現できなかったな、あの夢は。天国的な夢でね。キリストの中に眠ると、朝起きる時に力がきている。ヘタするともう、4時頃に目が覚めてしまう。それでまた本を読みだすと、今度は眠たくなってまた寝ると、今度は8時頃になってしまう。

要するに、そういうことで、

「死人のうちから立ち上がれ」

と。生命の光。ヨハネは光の福音だね。「光」。死に対しては「生命」。

●聖霊にて満たされよ

15 されば慎みてその歩むところに心せよ、^{かしこ}智からぬ者の如くせず、^{おろ}智き者の如くし、^{おろ}また機会をうかがえ、そは時悪しければなり。¹⁷ この故に愚とならず、主の御意の如何を悟れ。¹⁸ 酒に酔うな、放蕩はその中にあり、^{むし}寧ろ御

霊にて満たされ、

この「寧ろ」も弱^{むし}いんだ。

「そんなことではないぞ、御霊にて満たされよ」

と。それぞれ人間は天下一品なんだ、「落ちこぼれ」なんてものはない。今の教育者はダメだ。それぞれのよさというものを本当にみてやらないから。

「そうではなくて、聖霊にて満たされよ」

と、「プレローマ」という字が使っている。聖霊に満たされることは、いくら満たされたって、満たされ過ぎることではない。溢れなくては。

¹⁹ 詩と讃美と霊の歌とをもて語り合い、また主に向かい心より且^{かつ}うたい、
かつ讃美せよ。

ここに見るように、ユダヤ人は音楽の世界、歌の世界は素晴らしい。だから、あの「詩篇」「テヒリム」というのは本当は「讃美の書」というんです。歌の世界は国境がないからいい。理念的な、観念的な歌をうたってはダメだけれども。

「讃美と霊の歌」、歌を歌つても、霊歌的な質になる。¹⁸、¹⁹節は楽しい節だね。聖霊に満ちると、おのずからそうなる。

「我々の生活そのものが歌であれ、讃美であれ」



ということだ。詩篇も、読んでみると、始めは非常に悩みの中で苦しんで涙を流しているけれども、終りの方になると、みんな詩篇はやっぱり讚美してます。ただ、詩篇にちよつと欠けているのは、「愛する」という言葉が非常に少ない。その点ちよつと詩篇は欠けている。何しろ敵が多かったから、

「あいつをやっつけてください」

と祈っているのがたくさんある。

「敵をも愛せよ」

というキリストの角度が出てこない。

20 凡ての事に就きて常に我らの主イエス・キリストの名によりて父なる神に

感謝し、²¹キリストを畏^{かしこ}みて互^{したが}に服え。

「名によりて」という訳もおかしい。「名に在つて」「エン・オノマテイ」です。

「名に在つて感謝する」

と。「に在る」という、「エン」という字が非常に大事です。「によつて」というと、一つの手段みたいになるけれども、「の中にあつて」です。その中になければ、本当の讚美ができない。

●福音は3L

だから、「光」と「生命」と「愛」。福音は愛の光であるし、生命の光でもある。光と生命と愛は、離すことができない。これはみな「エル」(L)で始まる。英語でいうと、「ライト」「ライフ」「ラブ」。ドイツ語でもみな「L」で始まる。3L。福音は3L。3Lが一番でているのはヨハネ伝です。この3Lをひつくるめたのが「スピリット」「霊」です。だから、終りに、

「御霊にて満たされよ」

と書いてあったでしょ。ヘブライ語の「ルーアツハ」、ギリシヤ語の「プネウマ」です。これらが聖霊から来ている。聖霊の光であり、愛であり、生命である。何といても、聖霊が大事です。キリストの霊です。土台は十字架から来ている。これが愛だからね。己を捧げた愛、犠牲的な愛です。

今日のお話は少し早く終わってしまったけれども、そういうわけで、イザヤ書をまたよく読んでおいってください。

